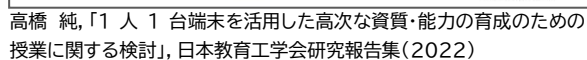


複線型授業による主体的・対話的で深い学びの充実 ―昨年度の授業分析と今年度の実践報告―

昨年度から「主体的・対話的で深い学び」の充実を目的として「複線型授業」による授業実践を行っている。3年生家庭科のA 家族・家庭「保育」を題材として、生徒が主体的に学びを選択、調整し、複線的に学習を進めていく題材計画である。昨年度の授業実践の授業分析と今年度の実践の様子について報告する。

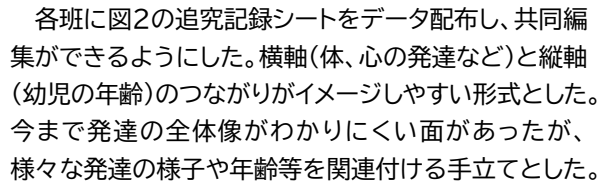


教師主導の一斉指導とは異なり、生徒一人一人が自ら学習の進め方を選択・調整しながら学が授業形態である。学習の経路だけでなく、誰とどのように協働するかについても、生徒自身が自己決定する。また、クラウド上で白紙のワークシートなどを共有し、互いの考えをいつでも参照できる「白紙共有」や「他者参照」といった仕組みも特徴がある。

以下の題材計画を立て、実践を行った。

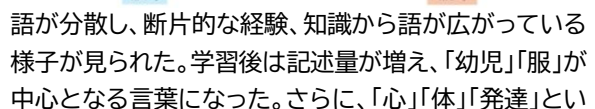
従来の授業では、2～4時間目の中で幼児の体、心、生活を1時間ごとに進める計画を3時間の複線型学習として設定した。4人グループの小集団で話し合い、学び方や手順を決めることとした。

生徒が主体的に学びを選択できるよう、学習環境の充実を図った。以下の写真のように、幼児服の実物、幼児人形、幼児のおもちゃ、発達に関する掲示資料、クラスルームを活用したリンク集、資料動画などを用意することで様々な方法から学びを最適化する機会とした。



学習前の記録、毎回の学習記録、学習後のふりかえりを 1 枚の用紙(スプレッドシート)に記録していく OPP シートをふりかえりで活用した。

学年全体の共起ネットワーク図から、題材の学習前は「生地」「素材」といった物理的・感覚的な特徴に関する



った言葉とのつながりも強く見られ、幼児服と発達を関連付けて理解している様子が見えた。これは、断片的だった知識が「幼児の発達を支えるための衣服」という構造的な概念へと統合されたためと考えられる。

班ごとに共起ネットワーク図を作成しても同様の傾向が見られ、複線型授業で学習経路が異なっても学習の目標へ到達できることが示された。また生徒個々の記述から読み取ると学習後のふりかえりには、学習前にはなかった「体の発達」や「自我」といったキーワードを用いた記述が見られた。

このように A 領域「幼児の発達」の学習において、複線型授業を用いた生徒主体の学びは、多様な学習方法を保障しつつ、深い学びの実現に高い効果があることがわかった。

5 今年度の実践と授業の様子について

今年度も題材「幼児服の秘密」を設定して、5 時間の題材計画で複線型授業を行った。昨年度、初めての授業形態のため 4 人班による協働を前提としていたが、今年度は学習方法や協働の有無についても個人の判断に委ねた。



本校は、各教科の活動において 4 人班を学習活動の基盤としている。そのため生徒個々の選択で学習方法、手順を工夫しながらも必要に応じて協働する姿が見られた。例えば、幼児人形を複数人で観察し、感想を伝え合う、幼児の大きさが気になった生徒同士で幼児の目線を確認め合うといった姿があった。

以下は、生徒の記述の一部である。

	学習前	学習後
生徒 A	小さくて汚れやすい。可愛いものが多い。着心地が良さそう。運動性能が高く伸縮性に優れている。息苦しくならないように、首元が大きくなっている。着やすいようにゴムなどになっている。	幼児服は赤ちゃんの成長に合わせて様々な工夫がされていると思った。でも、一貫しているのは通気性や伸縮性、着せ替えのしやすさとおもった。生まれた頃の頃は、排泄などをした後すぐに取り替えるようにボタンだけの服や、おむつだけ開けられているなどの工夫がされている。(中略)服にポケットをつけたら、大きなボタンをつけたりすることで、子供の興味をひいて自分でやらせたり学習させたりすることができる。まだ自分でできないうちは小さいボタン。制限を緩くしすぎるとダメなことを学習できないので関わり方を考えるべき。
生徒 B	肌に優しい布を使っている服。一歳くらいの子のものはおむつ替えがしやすいようにボタンで簡単に開くようになっている。伸縮性がある服(動きを妨げない・激しい動きもできる)フードや紐はついていないものが多い	今回の学習を通して、幼児服には幼児の心身の発達や生活習慣に合わせた工夫があるとわかりました。例えば、幼児服には肩スナップボタンが付いていることが多く、それは幼児の「体に比べて頭が大きい」という特徴のためだと知りました。しかし、それだけではなく、「暗いところを怖がる」や「自立心が芽生え始める」といった心の発達にも深く関係していると思いました。また、幼児は 1 日の大半を遊んで過ごすため、幼児服にはフードやリボンがついておらず、安全性に配慮されているとわかりました。それだけでなく、幼児の動きを制限しないように伸縮性のある素材が使われていて、幼児がより学びやすいようにしていると思いました。これらの工夫の中で、幼児服は体・心の発達に適しているだけでなく、幼児の自立をサポートするという重要な役割を果たしていると思いました。

生徒の学習前後の記述を比較すると、個人での複線型授業であっても「幼児服」と「幼児の発達」を関連付け、発達に関する統合的な理解が深まったことがわかった。

生徒自身が解決したいと思える学習課題や主体的に学習を選択できる環境などを整えることで、生徒が自走する複線型授業を実現できることが示された。

引用・参考文献

高橋純(2022). 1人1台端末を活用した 高次の資質・能力の育成のための授業に関する検討. 日本教育工学会研究報告集

堀哲夫(2019). 新訂一枚ポートフォリオ評価